

EXHIBITION

MODERN PHOTOGRAPHY



■アレクサンドル・ミハイロヴィッチ・ロトченコ
《ライカを持つ少女》1934年

アレクサンドル・ミハイロヴィッチ・ロトченコ
[Alexandr Mikhairovich RODCHENKO]
1891-1956

1891年、ロシアのペテルスブルグに生まれる。モスクワのカザン美術大学やペテルスブルグの美術大学、モスクワのストロガノフ大学で美術を学ぶ。ロシア構成主義による芸術革新運動と密接につながり、タトリン、マレーヴィチ、リシツキーなどとともに歩んだ。20年代にはモスクワの高等応用美術研究所の教授となる。グラフィック・デザインや舞台装置を手掛けた後、1921年頃から独学で写真を始め、友人やマヤコフスキーや芸術家達の肖像写真を写す。クローズ・アップや鳥瞰・俯瞰等の特異なアングル、1923年から始めたフォト・モンタージュなど、既成の視覚を覆す作品を次々に発表した。その新しい視覚を取り入れたフォトルポルタージュは26年からモスクワの諸雑誌に掲載された。1923-28年雑誌「レフ」(新芸術左翼戦線、1927-28)及びその他雑誌制作に関わる。彼はマヤコフスキーの詩集やロシア構成主義の雑誌など、多くの表紙をデザインしている。1928年にロトченコを中心に革命精神を称揚する「10月」グループが結成されるが、31年にはグループを追われる。1956年モスクワに没す。

●用語解説 フォトグラム Photogram

印画紙やフィルムの感光面上に直接物体を置き、光をあててシルエット像をつくりだす、カメラを使わない写真技法。写真術発明の過程で、タルボットが作ったフォトジェニック・ドゥローイングと呼ばれるものがこの原型である。1920年代、モホイ=ナジやマン・レイなどによって、光と影が織りなす抽象的なイメージを定着させる手法として再発見された。マン・レイは、自分の名をとってこの技法をレイオグラムと名付けている。

フォトモンタージュ Photomontage

一枚の印画紙上に様々なネガを重ねて焼き付けることで、ひとつの写真画像を作成する技法。フォトモンタージュという言葉は、1920年代初頭にドイツのダダイストたちが使い始めたものである。モホイ=ナジ、ジョン・ハートフィールドらが、現実の断片を多層的に再構成して、新たな視覚的効果を生み出す技法へと発展させた。時には超現実的なイメージを生み出すために使用されることもある。

フォトコラージュ Photocollage

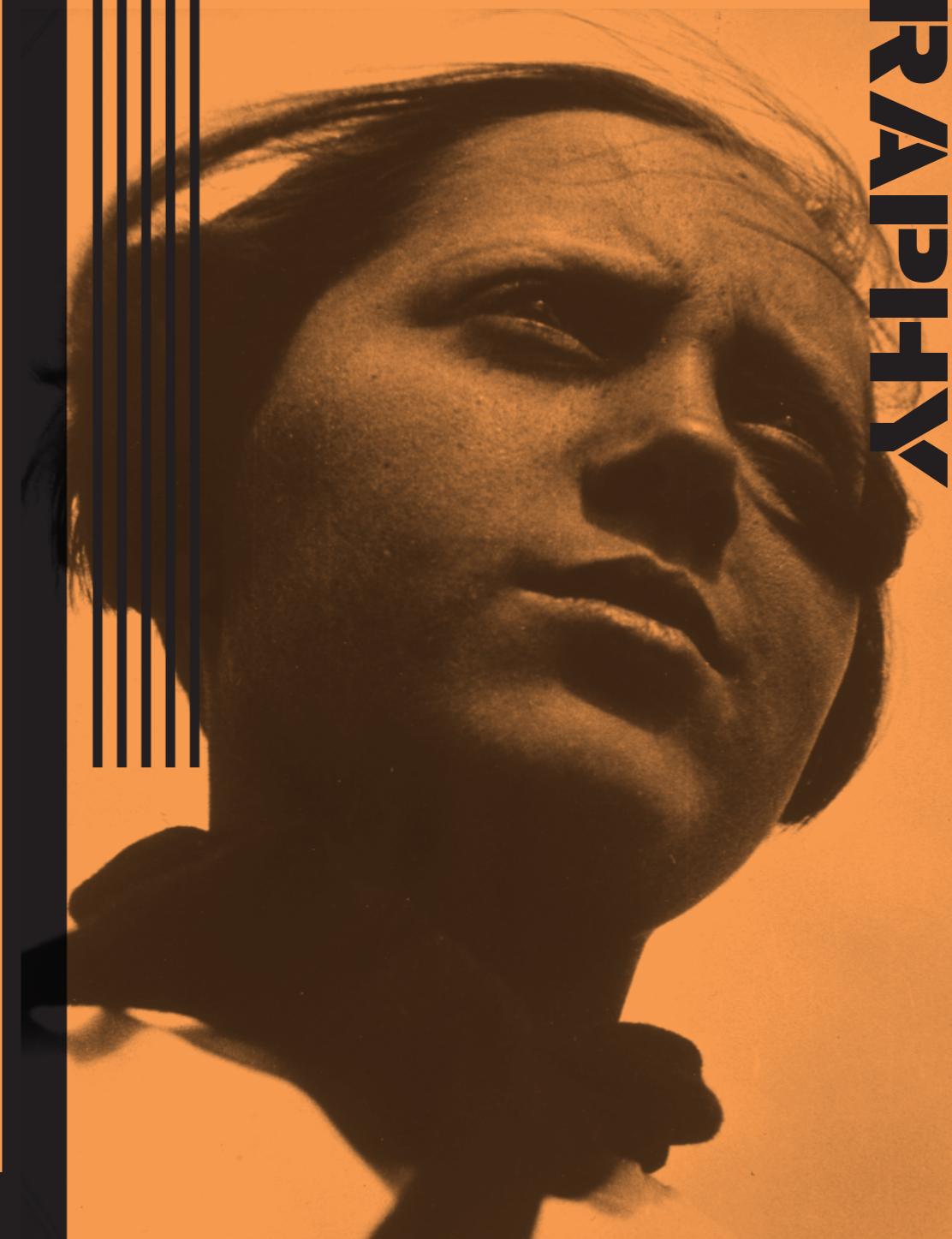
コラージュとは、「糊による貼付け」の意味である。キュビズムのパピエ・コレ(貼紙)から発展し、ダダやシュルレアリスムによって、本来相応関係のない映像を結びつける手法として展開された。フォトコラージュは、写真を切り抜いて、他の写真、版画、素描などを台紙に貼り合わせ、ひとつの画像を作る技法。幻想的な、もしくは諷刺的な表現効果が得られ、1920年代から30年代にかけて最も多用された。

MODERN PHOTOGRAPHY



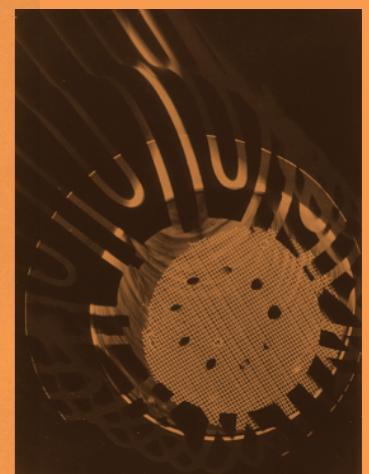
■マン・レイ 《眠るモデル》1929年頃

■アレクサンドル・ミハイロヴィッチ・ロトченコ
《少女同盟員》1930年



László Moholy-NAGI
August SANDER
Karl BLOSSFELDT
Hans BELLMER
Man RAY
BRASSAÏ
Maurice TABARD
Alexandr Mikhairovich RODCHENKO

■展示室4



■ラースロー・モホイ=ナジ
《フォトグラム》1923年

1920年代から30年代にかけて、写真表現の可能性は飛躍的に高まり、まさに写真の黄金期を迎えた。ドイツではモホイ=ナジが、カメラを介さず、直接印画紙に露光するフォトグラムを発見し、理論面においても「絵画・写真・映画」を著して、 Bauhaus を拠点に新たな写真表現の先駆をつけた。フランスでも同時期、マン・レイがレイオグラフ、ソラリゼーション、多重露光など、実験精神に富む魅力的な作品群を生み出した。さらにロシアでは、ロトченコがロシア構成主義の手法を写真表現に応用し、雑誌やポスター等の印刷媒体を駆使した写真の方向性を示している。展示室4では、ドイツ、フランス、ロシアにおいて展開したモダン・フォトグラフィの豊かな表現を、ナジ、マン・レイ、ロトченコの作品を中心に約130点展観する。

MODERN PHOTOGRAPHY

ラースロ・モホイ=ナジ

【László Moholy-NAGY】1895-1946

ハンガリーのモホル村近郊のバーチボルショドに生まれる。1913年ブダペスト大学で法律を学ぶ。第一次大戦に従軍後、ドイツ表現主義やロシア・アヴァンギャルドに傾倒し、ベルリンに移って1年後の1923年ワルター・グロピウスと共に Bauhaus の教授となる。

1925年重要な著作「絵画・写真・映画」が、 Bauhaus叢書の一冊として出版された。1930年に「ニュー・ヴィジョン」も刊行。ナチの圧力により、1928年グロピウスが辞任すると同時に彼も Bauhaus を去り、アムステルダム、ロンドン、パリでデザイナー、写真家、映画作家として生計を立てるが、1937年シカゴに移住。後にアメリカ写真教育に多大な影響を及ぼすことになるニュー・ Bauhaus の教授となる。1946年シカゴに没す。

アウグスト・サンダー

【August SANDER】1876-1964

ドイツ、ケルン近郊のヘルドルフに生まれる。家計を助けるため子供の頃から鉄鉱山で働く。写真は独学。商業写真家として各地を回り、ベルリン、リンツ、ドレスデンなどのスタジオで働く。1906年リンツで最初の個展を開く。1910年から開始した「20世紀の人々」のシリーズは、その後40年間以上も続く、サンダーのライフ・ワークとなった。ケルン近郊の農民のポートレイトに始まり、ドイツのあらゆる階層、職業の人々を網羅しようとしたこの壮大なプロジェクトは、全20巻からなる「ドイツ国民写真図鑑」としてまとめられるはずであった。1929年、60点の図版を含んだ「同時代の顔」が出版されるが、ナチの圧力で1934年に発禁となり、「20世紀の人々」も中止せざるを得なくなる。同シリーズはドイツの社会構造を写真で浮き彫りにしようとした綿密なプロジェクトであった。1964年ケルンで没す。

カール・ブロスフェルト

【Karl BLOSSFELDT】1865-1932

1865年ドイツの中央部ハールツ地方のシエロに生まれる。1886~90年ベルリンの王立美術工芸博物館学校で、彫刻と絵画を学ぶ。1891~95年イタリア、ギリシア、南アフリカに滞在し、採集した植物の写真を撮り始めた。1896年ベルリンに帰り、王立美術工芸博物館学校で植物のモデリングを教え、後同校が建築芸術大学に改変された際に教授となる。1900年頃より組織的に植物の写真を撮り始め、植物の細部の有機的なフォルムをクローズ・アップで撮影した写真をまとめて、1928年「芸術の原型」を刊行した。フランス・ローの「写真眼」(1929)とならんで、新即物主義を代表する写真集となる。この写真集によって、機械の眼の特質を駆使した「ニュー・フォトグラフィー」の代表的な写真家となった。

ハンス・ベルメール

【Hans BELLMER】1902-1975

シレジアのカトヴィツェ(現ポーランド)に生まれる。1923年ベルリンの工科大学に入学、間もなくゲオルク・グロッスやオットー・ディックスらと知り合いダダイズムに接近する。その後学業を放棄し、商業デザイナーとして働いている。

1933年ナチズムに抗議するため社会的に有用な一切の行為を行わないことを決心する。不気味でエロティックな少女の人形が創られ、34年には10点の写真を添えた「人形(Die Puppe)」を自費出版。シュルレアリストの眼にとまり、アンドレ・ブルトンらとの交友が始まる。また、世界各国で開催されたシュルレアリズム展に写真とデッサンが展示される。35年新たな人形を創り、室内・屋外の様々な状況を背景に写真に収める。第二次大戦後には、ウニカを撮ったシリーズがある。1938年にパリに移住、1975年同地で没す。



■ ラースロ・モホイ=ナジ
『世界の構造』1925年

EXHIBITION

マン・レイ

【Man RAY】1890-1976

アメリカ、フィラデルフィアに生まれる。本名エマニュエル・ラデンスキー。ユダヤ系ロシア移民の子として生まれ、1897年ニューヨークに移って、画家を志す。最初の結婚後、マン・レイを名のる。スティグリツを通して近代美術の運動に触れる。1915年自作の絵画撮影のため独学で写真に着手。デュシャンやピカビアとともにニューヨーク・ダダの運動に加わる。20年からは本格的に写真家となる。21年にパリに移り、プロの写真家として活動。ファッショングラフやパリの芸術家たちのポートレイトなどを撮る一方で、実験的な写真を開始。三次元の効果をもつフォトグラムである「レイヨグラフ」、反転現象を効果として用いたソラリゼーションなどの様々な新技法を開拓した。シュルレアリズムの運動に参加。第二次世界大戦中はアメリカに逃れ、51年よりパリに戻った。60年ころに実験的なカラー写真を試みたが、しだいに絵画に関心を移した。



■ マン・レイ
『Eye-Sea ルネ・マグリットへのオマージュ』
1938年

ブラッサイ

【BRASSAI】1899-1984

1899年ルーマニアのトランシルヴァニア地方、ブラッソー(当時はハンガリー領)に生まれる。本名ギューラ・ハラス。ブダペストやベルリンの美術学校で絵画や彫刻を学ぶ。1925年パリへ出て画家及びジャーナリストとして活動する。この頃から〈ブラッソーから来た男〉という意味で〈ブラッサイ〉と名のる。1930年頃、写真を始める。日常のパリを多少の演出を加えながらボタージュし、やがて「夜のパリ」(1933)を出版する。この写真集でパリの記録者としての名を決定的なものにした。さらに「ミントール」、「ヴェルヴ」、「ハーパース・バザー」等の雑誌に作品を発表した。またピカソやダリ、ブラックといった画家や、ヘンリー・ミラー、ジャック・プレヴェールといった文筆家との交流から後「我が生涯の芸術家たち」(文芸家協会賞受賞)を纏めた。特にピカソとは親しく、彼の助言からパリの落書きを写した〈グラフィティ〉のシリーズが生まれた。1984年ニース近郊ボリュー・シュル・メールで死去した。

モーリス・タバール

【Maurice TABARD】1897-1984

1897年、フランスのリヨンに生まれる。絹織物製造業を営む父の工場で、織物のデザインを学ぶ。1914年アメリカ、ニュー・ジャージー州パターソンに移り、絹織物のデザイナーとして働く。1918年ニューヨークへ移住。絵画を描く傍ら、ニューヨーク写真研究所で写真を学び始める。1922年ニューヨークのスタジオで働き始める。1938年フランスへ帰国。パリで「ブュ」、「アール・エ・デコラション」、「アール・エ・メティエ・グラフィーク」等の雑誌のためにフリーランス写真家として働く。1930年広告とイラストの仕事をするための写真スタジオを創設したが、2年と続かず不成功に終わる。マン・レイやリーミラーとは無関係にソラリゼーションを発見して、「ソラリゼーションに関する覚書」と題する論文を1933年に発表する。1946年にハーパース・バザー誌に雇われ、同誌の有力なファッショングラフ写真家の一人となる。1984年フランスに没す。